

---

# **病院の屋上/生きる鼓動、命の熱**

pandi剛種

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

病院の屋上／生きる鼓動、命の熱

### 【Zコード】

N5787Z

### 【作者名】

pandi 剛種

### 【あらすじ】

病院の屋上で、彼女はこう言った。

「私ね、もうすぐ死ぬの」

屋上で、僕はその女の子を見た。

病院の、物干しひおに干されたシーツがきれいに並んだ、無愛想な屋上。

何もないフェンスだけがまるで動物園の獣を閉じ込めるかのようにあたりを取り囲む冷たい空間。

彼女が立っていた

色白で、白髪が混ざっていて、それでいて腰あたりまで伸びた長い髪。

病院服を着て、裸足で、自分の何倍の背丈もあるフーンスを見上げて、冷たい青空を仰ぐ小さな女の子。

さみしげな横顔。

ギュッとフーンスを握り締めている。

今にもその白い肌から血が滲みそうなくらいに

フワリとシーツが衣擦れの音を立てて風に舞う。

彼女の長い髪もフワアと風に漂つて、ほつそりとした小さな背中が立ち尽くす僕の視界に映った。

差し込む秋の日差しに、彼女の背中はとてもきれいに映った。

まるでその背中から翼が生えてきそうなくらいに

「私ね、もうすぐ死ぬの」

一言、彼女は最初に僕にそう告げた。

いきなり出会って、ベンチに座つて、最初の一言だった。

まだがいに名前も名乗つていないので、彼女はそう言つてほほ笑んでいた。

怖くないの、とは尋ねられなかつた。

怖いに決まつているのに。

それでも彼女はパタパタと床につかない足を前後させ、時折僕を見上げて、嬉しそうに笑つていた。

その笑顔は屈託なく、嬉しそうだつた。

「昨日ね、私、『ご飯一杯食べたの。お茶碗に一杯の『ご飯つ。おこしかったよ』」

その日から、少しずつ僕は彼女との屋上で会つていていた。

午後一時。

屋上の隅の小さなベンチで、30分。

長いやうな、短いやうな時間の中で、僕は隣に座る小さな少女の笑顔を見つめ、微笑む彼女の唇からこぼれる話を何度も頷いていた。

「テレビもね少しだけ見れた……何が面白いのかわからなったけど

「明日は検査なの。多分注射とか痛いけど、私泣かないよ。だつて強いもの」

「もう少ししたら一般病棟から隔離なんだけど……お兄ちゃんには覚えるよ。だって外には出られるもの」

「でも……もうすぐ歩けなくなるって……呼吸が出来なくなつて、頭の中真っ白になつて……」

「それでねつ、死んじやうの、私つ

彼女は微笑んでいた。

「歩けるなくなつたら、お兄ちゃんに会いに行けないね

病棟に行くよ。

僕がそう言つたら、彼女は微笑みながら力いつぱい長い髪を振り乱し僕の言葉を否定した。

「だあめつ。お兄ちやんとは毎日ソリソリ会つの」

「私の部屋に来ちゃダメだよつ」

「絶対だからねつ」

少しだけ頬を膨らませ眉をひそめて、子供も言つてゐる母親のように、彼女は口酸つぱく僕にそつ告げた。

僕はぎこちなく頷いた。

少女はまた微笑んで、私の手を握つてくれた。

「歩けなくなるまで、お兄ちやん。ここでまたお話ししてね  
わかった。

そつとしか言えなかつた。

願わくば、そんな日が永遠に来なことを願つて、僕はぎこちない仕草で頷くしかなかつた。

「よかつた……ありがとつお兄ちやんつ」

少しかすれた甲高い声で、少女は微笑んだ。

本当に、とてもうれしそうに笑っていた。

僕の手を握る、その小さな手はとても熱かった。

まだ彼女は生きていた。

カーン……カーン……。

遠くから聞こえる隣の中学校の五限を告げるチャイムの鐘。

僕らの時間が終わる音。

彼女は少しうつむきながら、ようよひと息を呑みベンチから足をおろし、立ち上ると、私の前に立って小さく手を振った。

「じゃあお兄ちゃん、また明日ね！」

私はぎこちない笑顔で手を振った。

少女は優しく微笑んでいた。

彼女と屋上で会話を交わし続けて、気がつけばひと月が経過していた。

その間に母の骨折入院が終わり、母はこの病院から出ることになつた。

僕もこの病院を訪れる理由はなくなってしまった。

最後、とこづわけではないけれど、僕は母が病院を出るその日に、あの屋上へとやってきた。

午後一時。

同じベンチの下で僕は彼女を待った。

僕がこの病院を出ていくと、彼女に伝えたかった。

だけど、やつてきたのは空しさと胸騒ぎだけだった。

カーン……カーン……

遠くでチャイムの鳴り響く音が聞こえる。

午後一時半。

もうすぐ、歩けなくなるかもしれない。

彼女の言葉が頭の中をよぎった。

気がつけば、僕はベンチからはじき出されるように立ち上がり、心の胸騒ぎにせかされるままに走りだしていた。

病院中を駆け回った。

ナースステーションの看護師の人に少女の特徴を聞き、医師の方に

彼女の事を聞いて回った。

誰も知らないといふ。

誰もわからないといふ。

そんなはずがない。

彼女はここにいた。

彼女は屋上で微笑んでいた。

優しく、強く僕に微笑みかけていた、とても強く僕の手を握り締めていてくれた。

傍にいてくれた

気がつけば午後三時。

見つけたのは、七階のとある個室病棟。

得体のしれない機械に囲まれて、いくつもの管に腕を刺されて、大きなベッドにくくつづけられて、彼女がそこにいた。

苦しげに胸元を上下して、顔をしかめて目を閉じていた。

何かに耐えるよう

「……陽菜……ちゃん」

僕は彼女の名前を呟く。

彼女は少しだけ目を開けるとびつしつと汗をかいた顔をこちりに向けて、僕を見上げた。

焦点の合わない目が僕を見つめ、そして程なくして、目をスウと細め、彼女は呼吸器の下で少しだけ微笑んだ。

嬉しそうだった。

「おにいちゃん……」

「…………じめん…………遅れて…………」

「ううん…………来てくれて…………嬉しい」

彼女は嘘をついていた。

僕はあの場所に彼女がいなくなるまで、その嘘に気付いてあげられなかつた。

僕は

「…………私ね…………もつすぐ死ぬの」

そんなことない。そんなことないッ。

僕は彼女の手を握り締める。

細くて握れば今にも手折れそうで、とても冷たくて。

それでも僕は彼女の小さなその手を強く握りしめる、僕の体の熱が  
彼女へと移るよ。」

生きてほしい。

生きて、また彼女と話をしたい。

「…………お兄ちゃん…………」

こんなところで死んでどうするんだッ。

君はもっと生きていいい人間なんだ。神様だってそう言つてくれるはずだ……もつと生きようとしてくれよ。

なんで……死のとするんだよ…………！

「…………めんね…………めんなさい」

違つ……そんな言葉が聞きたいんじゃない。

僕は……僕はつ。

あの日から、彼女と出会つ場所は屋上のベンチから、狭い彼女の個室へと変わった。

今度は僕の方から話を始めたことにした。

中学校のこと。クラブのこと、クラスメイトのこと。学校の行事のこと。

クラスメイトは相変わらずバカで、よく僕も一緒に教師に怒られるつて。

秋が近いから、運動会の準備が始まつていて、クラスの準備は中々思うように進まなくて困るつて。

今度は君と一緒に運動会に出てみたいつて。

彼女は微笑んでいた。

呼吸器越しに少し苦しげな息遣いをにじませながら、それでも僕の手を僅かに握り締め、優しく頷いてくれた。

「お兄ちゃん……一緒に……みたいね……運動会」

ああ。

今度一緒に見に行こう。

冬は除夜の鐘を聞きに行こう。

春は一緒に夜桜を見に行こう。

夏は一緒に海に行こう。

秋は、ずっと一緒に君といょう。

「うん。……約束、だね」

彼女はわずかに小指を動かし、僕の小指に絡めた。

僕は彼女と指切りをする。

そしてまた彼女の手を握る。

神様……彼女を殺さないで……彼女を死なさないで

僕は彼女のそばにいたい。

彼女の傍ですっと

神様……神様ツ

叶つたのか、叶わなかつたのか、それはわからなかつた。

わかつたのは、彼女の病室はなかつたということ。

また、彼女は僕の前から姿を消した。

「どうして……。

昨日はまだ元気だった。

まだ優しく微笑んでいた。

あんなに手も動かしていた。

なのに

胸が苦しくて、息ができなくて、僕は気がつけば、かかりつけの医師に噛みつかの如き勢いで問い合わせていた。

医師は困った顔をしていた。

「波田野陽菜ちゃん、か　彼女は別の病院に移ったよ……」

「いつ。どこ……！」

追いかけたかった。

追いかけて、彼女の手を取らないといけない。

彼女は死のうと

「いたたたつ……外国の病院だよ」

「え……」

「あの子はハーフだし、向こうに親族も大勢いるみたいだし、なに

よつ提供者の数は断然向こうの方が多いから適合者も見つかりやすい

い

「あ……ああ……」

「……助かる可能性を模索してのことだよ。嘘はつかない

涙が出た。

なぜかはわからぬけど、多分、すぐ嬉しかった。

彼女は死のうしているんじゃない。

生きようとしているんだ。

頑張つてこの世界で、自分の命を探して、生きようとしているんだ

「……彼女、この病院にずっといたって最後まで、山ネてたよ……  
誰のせいかは、敢えて聞かないけど」

医師は少し娘めしげに僕にそう告げた。

「それでも最後はここを出ることを選んだ 誰かに会いたいって  
言つたよ」

僕は涙が止まらず、その場で泣きじゃへつた。

僕はよつやく、医師の襟もとから手を離した。

後日。

彼女からEメールが届いた。

まだ少しあeじゃない、たどたどしい日本語だった。

『お兄ちゃんへ。勝手に出て行つてごめんなさい。

私、生きることに決めたよ。

お兄ちゃんがね、生きてほしいって何度も言つてくれたの。

本当にわたし死ぬつもりだつたけど、お兄ちゃんが生きてほしいって言つたから生きることに決めたの。

だつて、お兄ちゃんあんなに真剣に私にしゃべり言つたから。

あんなに楽しそうに学校のこと話すから。

あんなにお兄ちゃんが笑つてくれるから

私がお兄ちゃんと一緒に生きたくなつた。

お兄ちゃんと一緒に、いろんな景色を見たくなつた。桜とか夏の

海とか冬の景色とか、秋の運動会とか。一緒に見たくなつたの。

お兄ちゃんが笑ってくれるから、私もね元氣でいらっしゃる。

お兄ちゃんが傍にいたから、私生きよつと思つた。

もしかしたら、私適合者つてこいつのがいなくて死んじゃつかもしれない。

でも最後まで頑張るよ。最後まで頑張つて、必ずお兄ちゃんのところに帰るから。

必ず、帰つてくるから。待つていてください。

大好きです  
お兄ちゃんへ『

僕は手紙を読みながら、胸が締め付けられるような、胸の中がぐるぐるとかき回されるような思いがした。

嬉しいような、さびしそうな気持。

今すぐ彼女の下に会いに行きたい。

今すぐ彼女のそばに行つて話をしたい。

彼女の手を、握つてみたい。

僕はその日から勉強の合間を縫つて、大量のエアメールを書き連ねることにした。

内容はそれほど酷はないけれど、今日起きた学校のこと、今日食べた飯のこと、明日のこと、昨日の事。

君に会いたいといふこと。

ずっと傍にいること。

彼女に伝えられること、伝えたいことを全て言葉に載せて紙に書き連ねた。

汚い字が紙に映つて、何度も書き直して、いつも寝るのは深夜になるけど、僕は手紙を書くことをやめなかつた。

郵便屋さんは、時間指定で届くよう頼んだ。

午後一時、彼女の下に届けられた。

高校受験が始まり、勉強をする最中、それでも僕はエアメールを届け続けた。

毎日の勉強、どこの高校に行くか、その高校がどんなもので、どこのにあるかなんかを伝えられる限りに書いた。

彼女もその言葉にエアメールで返してくれた。

楽しそう。そつち行つてみたい。

必ず行くね。

絶対行くから。

そう言つてくれた。

それだけで心の中が炎のよつに湧きあがつて、勉強なんてしなくても模擬試験で上位がどれるほどに頭が冴え渡つた。

そして希望通りの高校への進学が決まった時

「ごめんなさい。もつ手紙は出さないでください。

彼女はそう言つた。

何度も送つても、もう彼女からエアメールは届かなくなつた。

三度目。

彼女は僕の前からいなくなつてしまつた。

春

未だ彼女がどこにいるかわからないまま、僕はとぼとぼと学校に行く準備を家中ではじめていた。

手には鞄。服はブレザーに赤のネクタイ。

鏡に映るのは何一つ代わり映えのしない、中肉中背の男の顔。

ただし顔色はとても悪く、今にも死にそうだった。

怖かった。

もしかしたら、彼女はもう死んだのではないか、適合者がいなかつたのではないか、手術に耐えられなかつたのではないか。

もう、会えないのではないか。

また涙があふれた。

情けない。

どれだけ頑張つても、勉強を続けても、彼女に会えないよつじや、  
彼女を救えないよつじや

なんで……僕は生きているんだろうか。

僕は

「宗一 イー！学校遅れちゃうわよおー！」

情けない人間だ。

結局言われるままに生きて、言われるままに生かされるだけの人生  
じゃないか。

彼女が生きようとしていたのに 僕は未だにこんな家の中に閉  
じ込められたままだ、生かされたままだ。

彼女に会いに行きたい。

死んでいるのなら僕が死んでも会いに行きたい。

なんでもいい。

彼女の笑顔を見たい

「……行つてくる」

背中を押されるままに僕は、この檻からよつやく出る。

そして次の檻へと僕は歩いていく

「おー ふにゃあー！」

「うーほー！」

何かがぶつかる感覚。

もののすゞい速度で走つてきていたのか、すづく痛い。

僕は後ずさるままに胸元にぶつかってきた何かに顔をしかめつつ、視線を下に落とした。

そこには小さな制服姿の少女。

同じ高校の制服で赤いスカーフとブレザーとスカートを身にまとつながら、鼻を痛めた様子で鼻筋をさすつているのが見えた。

うつすらと灰色の瞳に浮かぶのは涙。

痛みを訴える小さな脣。

肩まで切りそろえたアッシュショウブロンドのすらりと伸びた髪をなびかせ、少女は紅い鼻をさすり、呆ける僕を見上げる。

そして唇を開く

「えへへっ、サプライズっ」

彼女は微笑んだ。

よく知る、笑顔だった。

「 陽菜……ちゃん？」

「えへへっ……一歳飛び級っ」

声が震えた。

喉がガラガラになつて身体が胸の奥から「ゴオ オオオツ」て燃え上がりつて、耳まで真っ赤になつていいくを感じた。

神様……神様……！

「髪ね……今まで染めてたの。黒じやないと見栄えが悪いから」

「お兄ちゃんすうと高校の話してたから。すぐに場所わかつたよつ

「お兄ちゃんこいつて、お兄ちゃんがこの場所で私を待つてるつて

「お兄ちゃん……」

「ただいまつ」

彼女が、ここにいた。

僕は呆けて声も出せず、ただただ立ち尽くしていた。

ただ彼女の少しあなかんだ、微笑みを見下ろしていた。

少し照れくさそうに頬を染め、彼女は小さな手を僕に絡めて少しだけ腕を引っ張つた。

とても暖かつた。

生きてる熱を感じた。

彼女は生きていた

「学校に行こう。お兄ちゃん」

「一緒に桜の花びらを見に行こう」

「ずっと……ずっと一緒にだからね」

「お兄ちゃん……大好き」

彼女は優しく微笑んだ

(後書き)

神様「（この子を殺してバットエンドは）いかんのか？」「ルシフエルちゃん」（流石にバットエンドはありふれ過ぎてるし何より可哀想だから）いかんでしょう

神様「一理ある。（ハッピーホンデ）切り替えていく。その前にこの子にはお薬が必要なようだね（ニツコツ）」「ルシフエルちゃん」「せやな」

バットエンド（やきう的表現）なんてこの現実にはいくらでも溢れてるもんですし、わざわざそんなもん小説にしてまで空想に持つてくるなんて流石におなか一杯ですわ、というのが私個人の意見です。まあ今回は少しストーリーが雑なので読みづらいとは思いますがご了承を

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5787z/>

病院の屋上/生きる鼓動、命の熱

2011年12月19日11時55分発行